



「杜若」

若

他界を見て現実世界を見直す

ポナヴェントウーラ・ルベルテイ

嬉しいことに、一年間国際日本文化研究センター(日文研)に滞在出来、じっくり京都の生活・文化現象が味わえたのである。京都での滞在は自分の研究のためにも大変有効であった。

ありとあらゆるイヴェント・公演・コンサートが毎日次から次へ盛んに行われ、パット燃えてパット消えるような慌ただしい感覚の国際都市東京とは違い、京都は、環境に溶け込んだものがじっくり味わえる日本文化の「都(みやこ)」であった。京都は、時代とともに日本の文化に特別な位置を占め、有形・無形の形象としていまでも色濃くその長い伝統の厚みと魅力を感じさせる。伝統演劇分野では、室町時代に、北山文化、東山文化等を全盛にもたらした足利將軍の政権より保護されて、そして近世にも栄えた能は、現在の京都の舞台でも深い趣を感じさせる。おかげで、京観世会館でも狂言も、充実した舞台が沢山楽しめた。

いろいろな能公演を観て、刺激が多いものは数多くあった。たとえば、法政大名督教授、能楽研究所の前所長西野春雄先生が監修・校訂・補綴した復曲能『鐵門』の舞台化。俳人の高浜虚子(一八七四〜一九五九年)が大正初期に初めて書いた『鐵門』が京都観世会館で一〇〇年ぶりに再演された。『青い鳥』で知られるベルギーの劇作家メーテルリンクの戯曲『タンタジールの死』に触発された虚子が、一九一六年末に書き下ろし、西洋戯曲を翻案した新作能『鐵門』を完成したが、上演は途絶えており、観世流の能楽師と研究者らが二年がかりで復曲しようである。信州・善光寺を訪れた旅の僧と、姫と老兵の霊の対面を描く『鐵門』の舞台は、姫を死の使者に連れ去られ、鉄の門で隔てられた老兵の悲しみが印象的であった。また、悪尼が死の使いを具象化する姿として現れる途端に、救いのないメーテルリンクの暗い象徴の世界に落とし込まれる凄み、迫力と怯えが感じられ、伝統の能と違ってさからうことのできない死の間を描いた宿命と無常の重さが浮き彫りになって強く痛感させられた。その日の番組の組み合わせも絶妙であった。復曲能の前に、ずっ

と観たいと思っていた『歌占』という曲も初めて観劇できた。世阿弥の長男、観世元雅の作曲とされている作品だが、観客を不思議な世界に呼び込んでくる舞台であった。加賀国白山の麓に住む男(ツレ)が、父を探している幼子(子方)を連れて占い師のもとを訪れる。そこに初夏でも雪に覆われている白山のイメージに誘われたかのように、若いのに総白髪の異様な人物(シテ)が現れて来る。総白髪にひた面(場合によって「邯鄲男」の面をつけることもある)うだが)の不思議な占い師である。手に短冊をつけた弓をもった占い師が、歌占いの実際を見せてくれる。『葵の上』の前場にも照日の巫女の梓弓に呼び寄せられた六条御息所の生き霊が現れる口寄せの舞台化が見られるのだが、また『巻絹』では音無天神の憑依した巫女が登場し、狂乱の舞が描かれている。世阿弥以前の能楽ではこのような神がかりになって狂乱し芸能を見せる演目が多かったようである。

しかし、普通は神に仕えて祈祷などをするのは、巫女であるのに反して、この場合は男巫である。

ワキとの問答を通して、もとは伊勢の神官で旅の道中で頓死し、三日後に蘇生したと語る。そのような体験から若いのに総白髪になつてしまっている男巫は、和歌の徳を語り、短冊に書かれている和歌をひいてもらう。それらをもとに占うくんだりも、緊張感がある。『北は黄に南は青く東白西紅の蘇命路の山』、『鶯の卵の中の時鳥己が父に似て己が父に似ず』などの歌を判じ、その解説から、父と別れ別れになった子方が父に会っているという結果が出て、実はこの占い師こそ幼子の父だったのだと判明する。親子の別れによる物狂としても異色異質の曲である。狂女物ではなく、男物狂であるが、『木賊』などとはまた異なる親と子供の絆、その感情に重点を合わせるよりも宗教的な色の濃いものである。

『百万』の主人公が仏に奉納する舞ではなく、現世の無常、死後の世界への恐怖を謡い舞うのであり、我が子を失った絶望に心の乱れた物狂となった女性の嘆き、その感情とは違う。事実、親子は再会を果たしたが、故郷へ帰る名残に、占い師は地獄の様子を描いた舞を舞う。得意芸となっている地獄の舞も、またこの曲の二番目のピークとなる。最後に占い師は神がかりとなり、責められ、苦し

(二ページより続く)
むが、やがて解放され、わが子を連れて故郷へと帰って行く。

ヨーロッパ文化の発祥地となる古代ギリシア、古代ローマにも、オルベウスの神話をはじめ、ホメーロスの『オデュッセイア』、ウィルギリウスの『アエネイス』でも主人公の地獄巡りが描かれ、印象深い感銘と刺激に富んだ場面になっている。また、その系譜がダンテの『神曲』に受け継がれ、ヨーロッパ中世の文化の最高の傑作の主題になっている。しかし、十年の漂流生活を余儀なくされたトロイア戦争の英雄オデュッセウスを主人公にした冒険物語のなかで、海の彼方にある地獄に降りるといったも、生きた人間としてその入り口にとどまり、生贄を挙げる事によって次々と死者たちが現れる。その一人、盲目の預言者ティレシアスの亡者に未来の事を教えてもらうが、亡母や戦友との対面が痛烈に感動的な場面となっている。苦難の末に帰国が叶うとの予言を聞き、嘆きのうちにオデュッセウスは冥府を去ってゆく。また、魔女キルケの助言を受けて死後の世界へ向かったオデュッセウスが、予言者ティレシアスと出合い、無事に帰国するための助言や、帰国後にすべきことなどを聞き出すという目的だけではない。オデュッセウスは、冥府降りによって生と死に対する態度、価値観、誉れ観、どんなに悲惨な命でも尊いという新しい認識、故郷に帰りたい、再び平和を回復したい志、人間として成熟し、本来英雄があるべき姿、平和の人間へと変わっていく。事実、その『オデュッセイア』の第十一歌を能任立てにした『冥府行々キア』という新作能もギリシア人演出家マルリノスと梅若玄祥、観世喜正などにより京都観世会館で上演されたのである。詞章も舞台も格調高く、能の技法を生かした物語には能楽らしく冥府の亡霊たちが主役になっている。オデュッセウスのように、我々観客もそこから導かれる運命、智慧を授けられ帰還できるような経験。なかにも主役になっていたティレシアスが生

験から、伝えるべきことを普通の智慧として我々にも提供してくれるのである。『歌占』の主人公も、臨死体験して戻ってきて、男としても、普通は女たち(巫女)に与えられた靈感を持つようになり、占ひ、託宣、神との交感などができるのみならず、地獄で自分の目を見た様子を舞と歌を通して語り伝える役目を与えられている。我が子とともに国に帰る名残に、男巫が世の無常をうたった曲舞のあと、死後の世界、斬槌地獄、剣樹地獄、石割地獄、火盆地獄、焦熱・紅蓮など、さまざまな地獄の苦しみ、陰惨な責めを舞い始め、地獄の様子を再現して神がかりになって舞う。

この地獄巡りの次第・クリ・サシ・クセは山本某(作詞)・海老名南阿弥(作曲)と伝えられているが、初めは世阿弥作と思われる『百萬』の能の中で舞われたようである。地獄責めの描写は、平安中期の源信が著した『往生要集』で体系的に描かれているインド以来の仏教の様々な地獄観(八熱地獄や八寒地獄等)、信仰、思想、文学、美術などに日本文化に甚大な影響を及ぼした仏教の六道輪廻の苦しみに満ちた世界観を強調する。六道絵、地獄草紙、餓鬼草紙、病草紙などに見える地獄の不気味さ、その想像世界を言葉と舞を通して優れた表現力で示す恐ろしく陰惨な舞による能の見事な仕掛けである。

『鐵門』の場合は、救いのない、近代の精神的な貧困ともいえる現代の人間の孤独が見えて来る。同じ観世元雅作の『隅田川』も、最後にならず宗教的な救いによる親子、母子の再会がめでたく収まらないまま、狂女物として暗い悲しみに沈む能である。『歌占』のシテも、神の責めを受けて苦しむなかで、凄惨な地獄廻と神がかりになった舞で、人間の生死の謎をしめし独特な世界を生み出している。

(ヴェネツィア、カ・フォスカリ大学アジア・地中海アフリカ学日本語日本演劇教授)

贄の血を飲んで変身する部分、オデュッセウスが亡き母と対面し、互いに手を取り合っても取り合えない『隅田川』を連想させるような場面、だんだん悲しみが深まっていくような演出が感動的であった。

また、『アエネイス』の主人公アエネアスは、トロイアから放浪を重ね、恋に落ちて自殺してしまったディードの国を離れて、迷いと不安を抱えながら、やつと西イタリヤの海岸に上陸し、クマエの巫女シビュラの案内で冥界を訪れる(第六巻)。普通の人間には出来ないことであるが、地下のハデスの王国への接近するには、『黄金の枝』を手に入れたアエネアスは怖ろしい世界、亡者たちの国をわたり、ようやく父アンキレーシスの霊に会うのである。父の霊が、将来のローマ史における全ての偉大な人物たちの大行進を示し、輝かしい国家の未来を語る。この場合も、アデスへの旅を通して、アエネアスが神化を経て、未知の行方を見せてきて、自分の運命、自分の責務を改めて知るのだが、それだけではなく、視覚的にも聴覚的にも臨場感のある描写をとおして、案内、語りとともに自分の感覚で外界の様子を目撃して人間の限られた見識、視野を超えて、生きた人間の世界に対する見方も改めて行く内に、英雄・人間として我々とともに成熟していくのである。

また、『神曲』のダンテは、生きた人間として地獄、煉獄、天国の世界を巡る旅に出ることによって、ヴェルギリウス、それからベアトリーチェの導きで、神の救いを達成し、人間として蘇るような経験を生きる。いずれの場合も、人間として蘇るような経験を生きる。いずれの場合も、下界・上界をめぐって見られた人間は、普通の人間と違う比類のない体験を味わったことにより、先見のみならず、特別な能力、英雄の次元を超えた世界、他界と諸次元の現象を見抜くようになる。冥界訪問後の主人公たちは、他の人間には与えられなかった「特権」となる痛烈な体験によって、特別な見識、能力、普通の人間にはない感覚が生まれ、神々、他界と直接ふれた体

■檜書店京都観世会館ロビー売店の「ごあんない催会時、および(木)(金)の午前十時から午後一時まで開店しております。
電話・FAX 〇七五―七五四―〇七五四
(電話は売店営業時のみ開通)

檜書店閉店時に限り、京都観世会館事務所にて左記商品を販売いたしております。どうぞご利用ください。ご購入の際は現金で、できるだけおつり銭のないようご用意いたします。

観世流特製謡本 全曲
観世流初心謡本 上・中・下
観世流仕舞入門形付 杉止

7月の演能予定(京都観世会館)		
8日	日	夏の素謡と仕舞の会
14日	土	ちかの会
15日	日	吉田後援会能「花の能」
17日	火	京都能楽養成会
21日	土	井上同門定期能
22日	日	林定期能
28日	土	面白能楽館
29日	日	片山定期能

能楽写真
ウシマド写真工房

一緒にうれしい
On Your Side
みなさまのすぐとなり京都中央信用金庫がいます。
京都中央信用金庫
本店/京都市下京区四条通烏丸西入ル
☎ 075(223)2525
☎ 03 0120-201-580(フリーダイヤル)
www.chushin.co.jp

御食事処
五常
観世会館内
TEL/FAX 075-393-7150
(携) 090-3051-4468

能装束製造
株式会社 **のむら**
京都市上京区室町通上立売上ル
TEL 075-441-3131
FAX 075-432-5225